# 櫻だより

氷見市立北部中学校
校長室から
令和７年８月２７日

## 言葉の力

始業式前、ある生徒との会話より。
「〇〇さん、私の話はいつも長い？　短い？　それともちょうどいい感じ？」
「ちょうどぐらいだと思います。長いと感じたことはありません。」
「そっか、じゃあ今日もちょうどいいぐらいを目指しますね。」
そして始業式後
「〇〇さん、今日の話はどうでしたか？」
「ちょうどでした。話の内容も私にぴったりでした。」
忖度があったのかもしれないが、少なくとも一人の生徒には伝わったようである。
そのことを素直に喜びたい。

私たちは言葉を介して思いを伝える。
どのように言葉を選択し、どのように伝えるか。いつも悩む点である。
伝えたつもりでも、実際には伝わっていないことが多い。伝え手の力量不足であろうが･･･。

言葉には力が宿る、言霊があるといわれる。
最近読んでいる本「ぼくの命は言葉とともにある　福島智　著」より
福島氏は、９歳で失明し、18 歳で聴力も失った盲ろう者である。
全ての光と全ての音を失ったとき、宇宙空間に一人放り出された感覚だったそうである。
その時に、命をつないでくれたのが「言葉」であった。

**「光」が認識につながり、「音」が感情につながるとすれば、「言葉」は魂と結びつく。**
**幽閉された暗黒の真空から私を解放してくれたものが「言葉」であり、**
**私の魂に命を吹き込んでくれたものも「言葉」であった。**

福島氏がどのようにコミュニケーションをとるか、それは、指点字という５本の指を点字のタイプライターに見立てて、指をトントンと叩き、思いを伝えるらしい。
福島氏は、盲ろう者になってから、都立大学に入学、金沢大学助教授を経て東京大学の教授に。

光も音も失われた世界を、私たちは想像することができない。
おそらく、自ら命を絶ちたくなるような絶望感を味わうのではないかと思う。
それでも福島氏は、**「この苦渋の日々は、神が与えたものであることを信じよう」**と、生きる使命感をもって、力強く歩んでいく。
そして、**「与えられている命を自分から投げ出すことは、例えば、突然災害などに見舞われて命を奪われてしまった人たち、生きたくても生きられなかった人たちへの冒涜なのではないか」**と、訴える。

魂に命を吹き込むような「言葉」を私は発しているか、それは全く自信が無い。
それでも、「言葉」を介して思いを伝える者として、一人でも多くの生徒に伝わる「言葉」を発していきたいと思う。